子どもの人間形成と幼年童話

米川　泉子

幼年童話は、幼児教育の分野ではどのように考えられているでしょうか。幼児教育の実践の現場では、４・５歳のクラスで先生が幼年童話を毎日一話ずつ読み聞かせをする、そのような経験を積み重ねるなかで劇遊びにつながっていくなどの活動がよくみられます。また、家庭では、幼年童話のお話そのものを楽しむ一方で、読み書きを覚えるため、何かを身につけるための道具や手段として、つまり「教材」として捉えられることも多いようです。このような幼年童話の状況は、アメリカでも同様に指摘されています。幼年童話はアメリカでは"Chapter Books”や“Early Reader”などのカテゴリー名で呼ばれ、アーノルド・ローベルの「がまくんとかえるくんシリーズ」を代表とするハーパーコリンズ社のＩ can read シリーズなどがよく知られています。アメリカでの幼年童話の出版状況は盛況ですが、「本物の」読書に子どもをつなぐためのレベルに沿って過渡的に消費するものとして、また、識字教育や読書指導に用いる実用主義的なものとして幼年童話が捉えられてきたことが指摘されています。

しかし、道具、手段としての価値、つまり「教材」的な価値は、幼年童話の側面のひとつです。子どもは幼年童話を読むことが楽しく、面白いと思うので、手に取るだけです。このように楽しく面白い活動のことを、教育学では「遊び」と呼びます。この「子どもが幼年童話を読むことを楽しんでいる」というシンプルな事実から、子どもにとって幼年童話はその年齢に沿った魅力的な「遊び」のひとつであることが見えてきます。そこで本講義では、教育哲学の観点から、幼児教育の特徴のひとつである「遊び」という概念に着目して、この時期の子どもが幼年童話を読むことには、一体どのような意味があるのか考えていきたいと思います。幼年童話など物語の世界で子どもが遊ぶとき、「教材」的な価値に汲みつくされない人間形成上の意義が認められるとすれば、それはいったい何でしょうか。

はじめに

１．「遊び」を通した人間形成

・「遊び」とは

・幼児期の子どもの特徴

２．有用性という観点からみた幼年童話

・「教材」的な価値としての幼年童話

・アーノルド・ローベル（Arnold Lobel）「おてがみ」から

３．幼年童話の人間形成上の意義

・マーサ・C・ヌスバウム（Martha Craven Nussbaum)の「物語的想像力(narrative imagination)」を手掛かりに

・アーノルド・ローベル「そこの　かどまで」、「ひとりきり」から

おわりに